

乳幼児期における自己および他者理解の発達(1)

— 研究の背景と目的 —

○遠藤利彦（聖心女子大学）・常田秀子（東洋大学）・無藤隆（お茶の水女子大学）
坂上裕子（東京大学）・保崎路子（お茶の水女子大学）

【問題と目的】 人が、自己や他者の関係性およびその内的・心的世界にどのような認知を働かせ得るのかという問いは、ある意味で、古来より長く哲学的論考の中核的テーマであったと言える(e.g. Baldwin, 1899)。しかし、実証心理学の枠内においては、この問いに対する関心が、相対的に低い水準に止まってきたと言わざるを得ない。特に、この種の認知活動が発達過程のどの段階にいかなる形で萌芽し、そしてどのような発達の推移を示すのかという問題に対する実証的な取り組みはごく最近になってようやく始まったと言っても過言ではなからう。こうした心理社会的認知の発達に対する関心は、今日、学際的色彩を強めつつ、様々な方向に広がりつつあるが、その嚆矢となったのはやはり、いわゆる“心の理論”(Premack & Woodruff, 1978)に関する一連の研究ということになるだろう。その中でも、Wimmer & Perner (1983)による“誤信念(false belief)”パラダイムの持つ意味は大きく、その開発以降、子どもの心についての理解は、飛躍的に解明が進んだと言える。しかし、これまでの研究知見の多くが、やはり、言語的反応が安定し、実験に導入しやすくなる、3歳以降の幼児・児童に主たる焦点を当てたものであることは否めない。私たちは、今まさに、こうした研究の現況を見直し、より早期の段階における心理社会的理解の究極的な起源と発達、およびその規定因と帰結の問題に積極的に目を向けていく必要に迫られている(遠藤, 1997)。

本研究は、こうした認識の上で、乳幼児期における心的社会的理解のまさに始原を探求しようとするものである。その際、本研究が特に関心を払い、分析の対象とするのは、乳幼児がいつ頃から、いかに自分や身近な他者について分化した知識を形成した深めていくのかという点である。“心の理論”と自己/他者理解の問題は、その概念規定からして、本質的に切り離せないものと言える(Moore, 1996)。従って、自他理解の発達を精緻に検討することは、潜在的に“心の理論”研究にも寄与するところが少なくはないと考えられる。

本研究は、元々具体的な目標として以下3点の解明を掲げている。(A)自己と他者(母親)に関

する知識を、発動主体性(agency)に関するものと、客体的特徴に関するものとに分け、それらの獲得過程を縦断的に追跡研究する。(B)子どもの自他理解の発達を支える要因は何かを、特に日常における母子の関係性の特質に着目して明らかにする。(C)子どもの自他理解は、他の側面の発達(例えば、言語、情動制御、遊びの特質など)にいかに関与するのか、あるいはそれと如何に相関連動するのかを明らかにする。(A)については既に報告済みなので、他(常田他, 1997, 第8回発達心理学会発表論文集など)を参照していただくこととし、今回の一連の発表では特に(B)と(C)に関わる問題について報告を行うこととしたい。まず(2)では24カ月時の母子相互作用の特質をreciprocityおよび母親のintrusionの観点から検討し、それが24,30カ月時の自他理解といかなる関連性を有しているのかについて分析考究を行う。次に(3)では、24カ月時における自他理解が、同時期のふり遊びの水準とどのような関わりを持つのかを検討する。さらに(4)では、子どもの12,18カ月時の自他理解が24カ月時の母子相互作用の特質(turn-taking, 応答性, 意図が食い違った場合の修復など)をいかに予測するかを明らかにする。

【方法】 ◇実験・観察対象：乳幼児とその母親34組(男児19名;女児15名)(その他、各年齢時に数組の母子を補足した)。◇実験・観察時期：各母子ペアについて、子どもの生後12カ月から36カ月に至るまで6カ月おきに計5回の実験・観察を行った。◇実験・観察場所：実験者2名が各母子ペアの家庭を訪問し、各種課題、自由遊び場面の観察、母親への面接などを実施した。◇今回の発表に関わる実験・観察の内容：①子どもが自分自身と母親(発動主体としての自分自身および母親/客体としての自分自身および母親)それぞれに関してどのようなレベルの理解を示すかを、Pipp et al. (1987)の手続きを一部改作した一連の課題を用いて測定した(12~36カ月)。②母親に、玩具(ままごとセットなど)や絵本などを用いて子どもと自由に遊ぶよう依頼、そこにおける母子相互作用をVTR録画し(18~36カ月)その後母子双方の言動について符号化を行った。